東広島の黎明展

浄福寺２号遺跡の有鈎銅釧、
横田１号遺跡のガラス製品と銅剣基部、大槇３号遺跡の銅斧

広島県安芸国分寺跡土坑出土品の一部

古くから穀倉地帯として知られ、現在まで連綿と発展し続けている国際学術研究都市『東広島市』。

ここには、「史跡三ツ城古墳」「史跡安芸国分寺跡」「史跡鏡山城跡」、日本の 20 世紀遺産 20 選「西条の酒造施設群」といった国の内外に誇れる遺産が、数多く存在しています。

これらは、現在の東広島市の礎を築いた人々の活動の証しであり、東広島市の 『明け方＝黎明』を彩る文化財です。

このたび、その黎明期ともいえる「古（いにしえ）」から続く遺跡や出土品の中から、市内に所在する国・県・市の指定文化財を中心とした文化財を紹介するとともに、新たに国重要文化財（美術工芸品：考古資料）に指定される「広島県安芸国分寺跡土坑出土品」も特別展示します。

東広島市に興味と関心を寄せていただくきっかけになれば幸いです。

２０２３年

東広島市教育委員会

東広島の黎明展　年表

時代		西暦	今回展示で扱った遺跡	その他の遺跡など
旧石器		37000年前	三ツ城古墳下層遺跡、溝口２号遺跡、西ガガラ遺跡、西東子遺跡、五楽遺跡、和田平遺跡	鴻巣遺跡
縄文		12000年前	上泓遺跡	三ツ城古墳下層遺跡、和田平遺跡、戸鼻遺跡
弥生	前期	3000年前　前10世紀		黄幡１号遺跡
	中期	2000年前	浄福寺１号遺跡、大槇３号遺跡、西東子遺跡、浄福寺２号遺跡、中島１号遺跡、西本６号遺跡	
	後期	1世紀	行摠１号遺跡、横田１号遺跡	青谷１号遺跡
古墳	前期	3世紀中頃	白鳥古墳	仙人塚古墳、才が迫第１号古墳
	中期	4世紀後半	三ツ城古墳	スクモ塚第１号古墳
	後期	6世紀中頃	宮ヶ迫第２号古墳、保田古墳、岩幕山古墳	花が迫古墳群、森信１号古墳、助平古墳
飛鳥		7世紀後半	西本６号遺跡	
奈良		8世紀初め	高屋うめの辺１号遺跡、磐門遺跡、安芸国分寺跡、安芸国分寺周辺遺跡	
平安		8世紀末	吉光谷遺跡（土坑）	原１号遺跡
鎌倉		12世紀末		御薗宇城跡
（南北朝）室町（戦国）		14世紀前半	御土居遺跡、大槇古墓、福成寺旧境内遺跡、城仏土居屋敷跡、薬師城跡	白山城跡　頭崎城跡　槌山城跡、鏡山城跡
安土桃山			大槇古墓	
江戸		17世紀初め	福成寺鬼瓦、四日市遺跡、赤瓦製祠、原村焼	御建遺跡
明治		19世紀後半	小谷焼窯跡	山陽鉄道開通
大正				
昭和				
令和		現在		

東広島の旧石器時代から縄文時代

日本列島に人びとが住み始めたのは、今から４万年前頃と考えられていますが、こうした人々の残した遺跡が多く発見されるのは３万年前頃からです。この時代は後期旧石器時代と呼ばれ、気候も寒<、海面は現在よりも 100m 以上低かったようで、朝鮮半島と陸続きでした。人びとは、今では絶滅して見ることのできないナウマンゾウやオオツノジカなどの大型動物を追い、やって来たと考えられます。

東広島市内では、広島大学構内の西ガガラ遺跡（鏡山（かがみやま））をはじめ、和田平（わだひら）遺跡（西条町福本（ふくもと））、五楽（ごらく）遺跡（西条町吉行（よしゆき））などで、この時代の遺跡が発見されており、西条中央の史跡三ツ城古墳の下層からも、動物を解体するために使ったと考えられる石器が出土しています。また、溝口（みぞぐち）2 号遺跡（高屋町溝口）から出土した石鏃の中には隠岐島で産出された黒曜石が使われたものがあり、海を越えた交流がうかがえます。

この後、今から１万年前頃、縄文時代になると氷河期も終わり、寒かった気候も徐々に暖かくなってゆきました。山ではシカやイノシシ、川や海では魚や貝が捕れ、ドングリやクリ・クルミなどの木の実も豊富に採集できるようになり、これにあわせて当時の人々の生活も変わっていったと考えられます。

特に、縄文時代は土器が発明されたことで、食材を煮炊きし、食べやすく加工する技術が発達しました。このほか、狩りのための石器、魚を捕らえるだめのモリや釣針なども発達します。

東広島市内では、数は多くありませんが、上泓（かみふけ）遺跡や日向一里塚（西条町上三永（かみみなが））などでこの時代の土器や石器が出土しており、縄文人が生活していたことをうかがうことができます。

西ガガラ遺跡

溝口２号遺跡

溝口２号遺跡出土の石器

東広島の弥生時代１～稲作のはじまり～

弥生時代は一般的に、日本の全国各地で稲作が広まった時代とされています。東広島においても弥生時代には稲作がはじまっていたと考えられ、そのことが分かる遺跡として西条町下見の黄幡１号遺跡があげられます。

この遺跡は弥生時代前期～中期のムラの跡で、水田に水を引くための灌漑用水路からは、弥生土器や石器とともに木製品（鍬・鋤・石斧の柄など）や、多量の加工木材が出土しています。

鍬

木製品

木樋に転用された船の部材

出土した加工木材の年輪年代を計測したところ、ヒノキ製のものは紀元前 424 年に伐採されたことが判明しました。また土器の外側に付いていた炭化物を測定（炭素 14 年代測定法）することで、土器が使われていた年代と、加工木材の年代が同じく紀元前 400 年代の前半で一致することが明らかとなりました。また、水路に据え付けられていた長さ５ｍ余りの木樋には、船の側板と考えられる加工痕が見られ、廃棄された船の一部を木樋の材料として瀬戸内沿岸部から運び込んで再利用したものと考えられます。

これらのことから、弥生時代前期から中期にかけて、現在の米どころ、西条につながる稲作が本格的に始まっていたこと、沿岸部との物資の往来が始まっていたことが分かります。

東広島の弥生時代２　～多彩な東広島の弥生文化～

稲作が広まった弥生時代は、東広島が西日本の各地域、そして東アジア世界と交易を通じて結びついた時期でもありました。

西条町田口の西東子遺跡からは、弥生時代中期（紀元前１世紀頃）に、九州・別府湾岸地域で作られた「下城式土器」の壺が出土しています。瀬戸内海を挟んで 200 ㎞近く離れた北部九州からもたらされたこの壺には何が入れられていたのでしょうか？また、西東子遺跡からは、吉備地方を中心とした瀬戸内沿岸地帯に広く分布する分銅型土製品が出土しています。分銅型土製品は、割られた状態で出土することが多く、祭祀に用いられたと考えられています。

海を渡った下城式土器：西東子遺跡

市内出土の分銅形土製品

貝輪の出た箱形石棺：行摠１号遺跡

出土した貝輪(左)とイモガイ

高屋町杵原の行摠１号遺跡の箱形石棺（写真の矢印部分）の中からは、イモガイを加工した貝輪（貝殻の腕輪）が出土しています。このイモガイは、奄美群島以南でしか産出されませんので、当時はかなりの貴重品だったと思われます。

有鈎銅釧：浄福寺２号遺跡

高屋高美が丘の浄福寺2号遺跡からは、スイジガイの貝輪をモチーフにした青銅製の有鈎銅釧が出土しています。当時、材料の青銅は朝鮮半島から輸入されたものが中心でした。

高屋町杵原の西本6号遺跡からは深青色のガラス製の切子玉が出土しています。ガラスも中国や西アジアでしか作られないものです。

一方で、弥生時代に東広島で稲作が行われていた確実な証拠も出土しています。高屋高美が丘の浄福寺１号遺跡の地面に掘られた貯蔵用の穴からは黒く焦げた米（炭化米）が出土しています。

中島１号遺跡

検出された土器棺墓

高屋町中島の中島１号遺跡から出土した高さ 85 ㎝にもなる弥生土器の大きな壺は本来、水を貯えるために使っていたのでしょうが、亡くなった乳幼児を埋葬する棺に転用しています。東広島の弥生時代人の習俗がうかがえる興味深い資料といえます。

東広島の弥生時代３　～地域の有力者の登場～

横田１号遺跡、大槇３号遺跡の出土品

弥生時代後期(１世紀頃)になると、全国各地で大きなムラや墓が造られるようになります。この背景には、稲作や交易などで得た富をムラの指導者が蓄えることで、人々の間に格差が生まれ、小さなムラを束ねるいわゆる「地域の有力者」が出現したことがあげられます。

東広島においても、弥生時代後期になると西条盆地を囲む山々の裾の小高い場所に大きなムラが作られるようになります。中でも注目される遺跡として、住居の跡からガラス製小玉、管玉と銅剣片が出土した西条町寺家の横田１号遺跡、同じく住居の跡から青銅器の銅戈を加工してつくった模造の斧が出土した西条中央の大槇３号遺跡があげられます。当時のガラ

ス製品は東南アジアや中国大陸南部からの舶来品で、青銅製斧も朝鮮半島から輸入した銅戈を加工したと考えられます。

このような舶来品は希少であり、「地域の有力者」が存在する大きなムラだけが持つことが出来たと考えられます。横田１号遺跡と大槇３号遺跡は黒瀬川を挟んで、南北に向かい合うように位置していますが、西条盆地の北と南の有力者がそこには存在していたのでしょうか?これらのことから、東広島でも弥生時代の後期には、肥沃な西条盆地での稲作などを通じて蓄えられた富を背景に、多くのムラをとりまとめる有力者が現れはじめたと考えられます。

東広島の古墳時代　～築造された古墳の系譜～

○古墳時代前期（4 世紀頃）

古墳とは弥生時代後期から出現した「地域の有力者」たちを葬った高い盛土を持つ大型の墓です。古墳時代は一般的に、大和盆地で前方後円墳が造られるようになった３世紀の終わりからと考えらます。

才が迫第１号古墳

現在、確認されている東広島の最初の古墳は、4 世紀の初めに造られた高屋町宮領の才が迫第１号古墳で、その後、4 世紀後半に高屋町郷の白鳥山に白鳥古墳が造られました。この古墳からは三神三獣鏡、三角縁獣文帯三神三獣鏡、素環頭太刀、碧玉製勾玉が出土しており、このセットは、あたかも「三種の神器」をイメージさせます。

白鳥古墳出土品

○古墳時代中期（5 世紀頃）

西条町御薗宇のスクモ塚第１号古墳は直径 60m の円墳で、造られた時期は 4 世紀代の可能性もありますが、西条盆地最初の大型古墳です。これに広島県最大の前方後円墳である史跡三ツ城古墳が続きます。

・三ツ城古墳〈史跡〉

空から見た三ツ城古墳

埋葬施設(第１号古墳)

三ツ城古墳は、3 基からなる古墳群で、その中の 1 号古墳は古墳時代中期、5 世紀初め頃に築かれた広島県最大の前方後円墳です。全長約 92m、後円部の直径約 62m、前方部の幅約 66m、高さは約 13m あります。後円部は 3 段に築かれ、円筒形や朝顔形の埴輪が 1,800 本あまり立て並べられ、衣蓋（権力者用の日傘）や鶏・水鳥・馬・短甲・盾・家などの埴輪も置かれていました。埋葬施設は後円

立て並べられた埴輪

副葬品

部の上に３基の石棺が設けられ、手前の２基は一回り大きな石槨で覆われています。遺体の周りには玉類、銅鏡、櫛、鉄刀、鉄剣、鉄鉾、鉄鏃などが副葬されていました。

墳丘は、大阪府の誉田御廟山古墳（伝応神天皇陵）などと同じ設計図で造られたと考えられ、くびれ部の造出には、堺市近郊（陶邑）で作られた須恵器（器台など）が供えられていました。また円筒埴輪の中には、近畿産のものも見られます。この古墳が造られた背景は、朝鮮半島や大陸諸国との緊張関係が続く中で、大和政権が安芸の首長たちに政治的集結を働きかけたためと推測されています。当時の社会状況を象徴するものです。

出土した須恵器(器台)

〇古墳時代後期（6～7 世紀頃）

古墳時後期の古墳の特徴は入口を開けて亡くなった人を何度でも葬ることができる「横穴式石室」が造られるようになったことです。いわば家族墓であり、この時期には地域の有力者を支える階層の人々も自らの古墳を造るようになりました。東広島の古墳時代後期の古墳をいくつかみてみましょう。

・保田古墳群〈市史跡〉

黒瀬町国近の保田古墳群には、１基の古墳の盛土に３つの横穴式石室が並ぶ珍しい古墳がみられます。古墳の形は一見すると前方後円墳のようにも見えますが、丸い円墳と四角い方墳がドッキングしているとの説もあります。石室からは須恵器、銀製の拵えを施した鉄刀、塗銀を施した耳環、ガラス小玉や碧玉製・水晶製の玉類が出土しています。

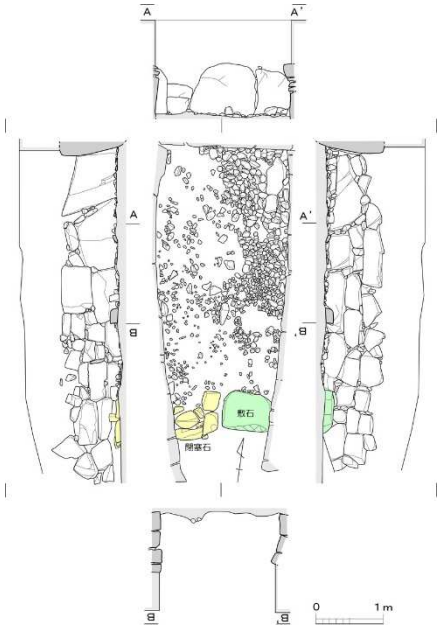
保田第１号古墳：第２号石室

保田第１号古墳：第３号石室

・岩幕山古墳〈市史跡〉

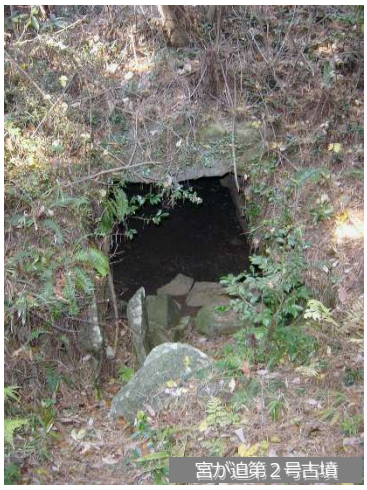
黒瀬町宗近柳国の岩幕山古墳は、直径が 12m、高さ 2.5mの円墳です。横穴式石室は長さが 4.8mですが天井部の石は失われています。石室からは須恵器、鉄刀、鉄鏃、ガラス小玉が出土しています。

保田古墳群と並び東広島で最も南に位置する横穴式石室の古墳です。



岩幕山古墳の横穴式石室

・宮ヶ迫第２号古墳〈市史跡〉



豊栄町乃美の宮ヶ迫第２号古墳は、直径 14m、高さ 5.5m の円墳で、見上げるような高い墳丘が特徴的です。また、横穴式石室は長さが 9m もあり、県内でも屈指の大きさです。石室からは須恵器、土師器、塗銀を施した耳環、碧玉製・水晶製の玉類が出土しています。

宮が迫第２号古墳の副葬品

東広島の古代　～安芸国の成立～

〇古代（飛鳥時代・奈良時代・平安時代）

古代の東広島は安芸国に属し、西条盆地には都と九州の大宰府を結ぶ主要な道・古代山陽道が通っていたと考えられます。西本６号遺跡や安芸国分寺跡など国の祭祀に関係する大きな遺跡や役所跡などが見つかっており、安芸国の中心地であったこの地の重要性がうかがえます。東広島の古代の遺跡をいくつかみてみましょう。

・西本６号遺跡＜市史跡＞

高屋町大畠・杵原の西本６号遺跡では土塀と溝を巡らした南北約 100m、東西約 80m の区画の中に、独立棟持柱をもつ掘立柱建物の神殿と神事後の直会※を行う四面庇大型建物、その周りに脇殿や倉庫とみられる建物が整然と配置された神社遺構がみつかっています。出土した土器は、７世紀後半の飛鳥時代のもので、須恵器高杯の内側に「解除カ」と墨書きされたものがあることから、この神社遺構は『日本書紀』の

天武天皇5(676)年を初見として数度の記載がみられる、国の穢れを祓うために催された「大解除」の儀式に関連する神社跡とみられます。儀式には神への供え物として馬が登場しますが、それを裏付けるように金銅製の毛彫馬具（杏葉）も出土しています。

※直会：神事終了後の宴会のこと。神霊への供え物を参列者が食することで、神霊の力を分けてもらうことを祈念した儀式であった。

西本６号遺跡

西本６号遺跡出土品

・高屋うめの辺１号遺跡

高屋うめの辺１号遺跡は、近畿大学東広島キャンパス内で見つかった遺跡で、小高い丘の斜面を階段状に削って平坦な面を造り出し、そこに奈良時代から平安時代の役所が建てられていました。

高屋うめの辺１号遺跡

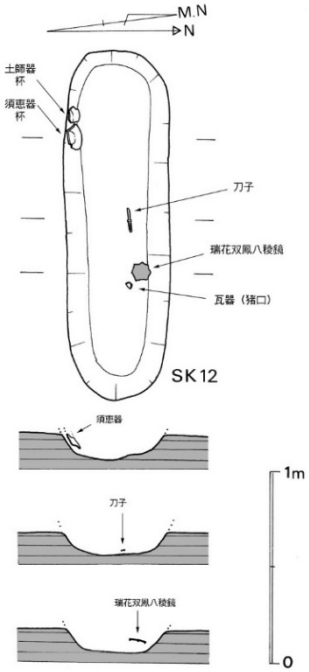
巡方

ここからは、土師器や須恵器とともに、役人が身に着ける束帯と呼ばれる衣装の腰ベルトの飾り金具である青銅製の「巡方」が出土しています。また役人が執り行った祭祀において使われた、須恵器製の馬（陶馬）も出土しています。

陶馬

・吉光谷遺跡

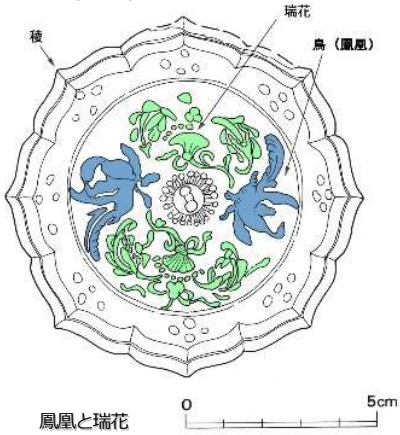
吉光谷遺跡の土坑墓(SK12)



土坑墓(SK12)実測図

西条町下三永の吉光谷遺跡は、主に弥生時代後期のムラの跡ですが、その中で平安時代後期の墓が１基だけ見つかっています。長さ 1.8m、幅 0.5ｍの素掘りの土坑墓ですが、平安時代後期の鏡が副葬されていました。「瑞花双鳳八稜鏡」と呼ばれるこの鏡は直径 9.4 ㎝で、八つの稜（突起）を持ち、描かれた鳳凰と花の文様はやや不鮮明ですが、全体的には美麗な形状をしています。鏡の表面に和紙の繊維や漆が付着していたことから、鏡を和紙で丁寧に包み、漆塗りの木箱に収めて、亡くなった方の傍らに置かれたものとみられます。また、鏡の近くからは小刀も出土しています。この鏡の持ち主はどのような人物だったのか興味は尽きません。

瑞花双鳳八稜鏡

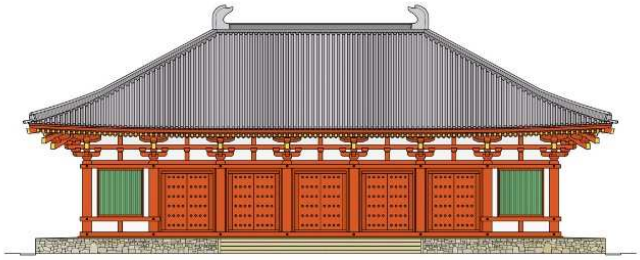


鳳凰と瑞花

史跡安芸国分寺跡～国の華・国分寺の創建～

奈良時代の中頃、わが国は災害が多発し、天然痘という疫病も流行して国土が荒廃していました。そのため、聖武天皇はこれを仏教の力で鎮め、国に平穏をもたらしたいと考えて天平 13 (741)年に諸国に、「国分寺」の建立を命じました。

安芸国分寺歴史公園


安芸国分寺金堂(推定復元図)

検出された国師院跡

木簡などが出土した土坑

国分寺は、僧寺と尼寺がありますが、西条町吉行の史跡安芸国分寺跡は僧寺にあたります。瓦葺で白壁朱塗りの柱を持つ国分寺の建物は壮大かつ美麗で、その威容は聖武天皇の建立の 詔 にもあるように“国の華”にふさわしいものでした。

安芸国分寺跡では塔・金堂・講堂・僧房・中門・南門が見つかったほか、僧侶を教育・監督し、重要な法要を指揮する安芸国の僧侶のトップである国師が駐在した国師院も見つかっています。

また、寺の東側に掘られた土坑からは「天平勝寶二年」の年号が墨書された木簡や木製品、土器が多量に出土しています。これらは国分寺で行われていた仏教行事を研究する上で貴重な資料として「広島県安芸国分寺跡土坑出土品」として国重要文化財に指定されました。

建立の詔では国分寺を各国の中心役所である国府の近くに建てるよう指示していることから、安芸国分寺跡は東広島が古代の安芸国の中心であったことを証明しています。

広島県安芸国分寺跡土坑出土品（指定説明書から）

安芸国分寺は、聖武天皇が国家の鎮護と安寧を願い、天平 13 年(741)の詔勅によって全国六十余国に建立された国分僧寺の一つである。

遺物は土坑の下層中に広がる木屑層から出土した。この土坑を切る溝の掘削は 8 世紀後半で、その後、9 世紀前半まで利用されていたと考えられ、土坑の時期的な下限を明確に示している。

広島県安芸国分寺跡土坑出土品の一部

土器底に書かれた墨書文字「安居」

遺物の内容は、「天平勝寶 2 年」(750)の紀年銘が鮮明にしるされた長大な木簡をはじめ、鋪設具類や米・油などに付けられていた貢進（荷札・付札）木簡が含まれる。これらには、安芸国分寺を取り巻く古代安芸国のさまざまな郡・郷名が記されており、この他に「共養」(供養)、「供料」などと書かれた記録木簡、また文書木簡や封緘木簡、題箋木簡も注目される。

墨書土器には「寺前」「寺」「佛」「像」をはじめ、仏教行事である「安居」「齋會」、僧侶名と考えられる「勝千」「厳及」などとしるされたものが含まれる。

土器は供膳品である須恵器を中心とし、これに少量の土師器が伴う。また、この他に塩を再加熱・固化するための焼塩土器も多

量に出土している。

焼塩は斎会などの調味料とともに仏法僧への供養品でもあった。

木器・木製品のうち特筆されるものは、箸・物指・角筆である。箸の中には長さ八寸（約 24cm）を超える長いものが存在し、それらは仏教行事に出仕した僧侶らの人数を確認するための籌の可能性もある。物指の表裏には複数の刻線が、側面には複数の切り込みがあり、これらは経紙などに罫線を引くためと思われる。また、先端部が鋭く尖った角筆も存在し、経典類に読み仮名や句読点などの符号を書き込んだ可能性もある。この他に糸巻きや檜扇・杓子なども見受けられ、加工痕が明瞭な木簡再生品も存在する。

以上、本件は、国分寺建立の詔から 9 年目の紀年銘木簡を含む、時期が極めて限定された出土品の一括であり、創建後間もない国分寺で勤修されていた仏教行事（安居・斎会）の一端を具体的に示す資料として評価され、その学術的価値は高い。

土器底に書かれた墨書文字「斎會」

東広島の中世

中世の東広島は鎌倉時代になって、鎌倉幕府からの派遣で東国から武士が移住するようになり、地域の新たな有力者となるものも現れました。その後、室町時代後半になると幕府の統制力が弱まり、大名間の争いや、これに伴う地域の有力者の間での争いが生まれ、いわゆる戦国時代が到来します。この時代に東広島では多くの山城が築かれ、戦乱の世の中で様々な勢力による争いがあったことがうかがえます。

鏡山城跡

槌山城跡

中世の遺跡として代表的な史跡鏡山城跡（かがみやまじょうあと）は、当時の有力大名であった大内（おおうち）氏が安芸国の拠点として整備した山城（やまじろ）で、現存する最古の城掟（城を守るための規則）が制定されています。城には交代で番をする「城衆（じょうしゅう）」を配置し、城の維持管理費をまかなうための土地、「城料所（じょうりょうじょ）」などを設定していたようです。

その後、北方から尼子（あまご）氏が攻め込んできたことで鏡山城は落城してしまいます。大内氏は西側へ引いて守りを固めるため曽場（そば）が城（じょう）や槌山城（つちやまじょう）などを築きます。こうした

土居遺跡

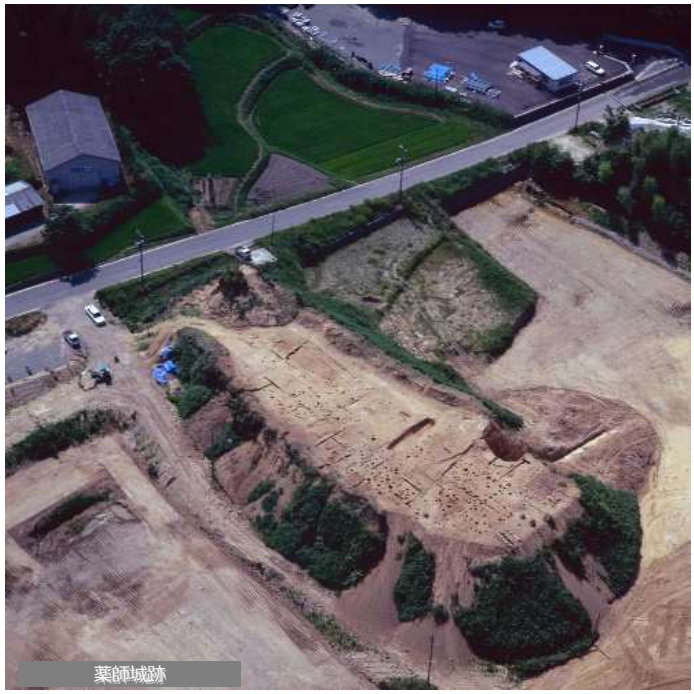
城仏土居屋敷跡

御土居遺跡

様々な有力者間の争いがありましたが最終的には、毛利氏が一帯を平定したことで終わりとなります。

出土した土師質土器(皿)：御土居遺跡

中で山城以外にも平地に作られる平城も現れます。代表的な平城の遺跡が土居遺跡や城仏土居屋敷跡です。これらは土居の名前の通り土塁とそれを囲む堀で構成されています。東広島の戦国時代は、


薬師城跡

東広島の近世～近世の町屋跡「四日市」の成立

・史料から見る「四日市」の移り変わり

近年、発掘調査が実施されてその成果が蓄積されてきた「四日市遺跡」についてみてみることで、近世の東広島を考えてみます。

西条「四日市」は、街道沿いに商いを行う目的で発生した市場を起源としており、「四」の付く日に定期市が開かれたことがその名の由来で、戦国時代後半には存在していたようです。

四日市の名が出てくる最初の史料は、天正3(1575)年の島津家久の旅日記『中書家久公御上京日記』に、「猶行てさいちやうの四日市といえるを打過．．．」とあるのが最初です。その後、文禄4(1595)年頃に、毛利氏が直轄地を支配するために、「四日市目代」を置いたという記載が毛利氏関連の史料にもあります。

江戸後期の寺家村の医師、野坂完山の『鶴亭日記』には「慶長4(1599)年、四日市町割之刻より除地…」とあることから、戦国時代の終わりごろには、市場から町へと本格的に整備されたことが伺えます。

江戸時代になると、寛永年間（1624～1643）に広島藩が西国大名の参勤交代のために街道整備を行ない、現在の西国街道と四日市宿が成立したと考えられます。

・遺跡から見る「四日市」の移り変わり

史料に「四日市」名が出てくる戦国時代以前の四日市遺跡からの出土遺物は、弥生土器や須恵器、布目瓦といった古代のものもありますが、建物跡などは見つかっておらず、遺物の量も多くありません。その後、市場が開かれはじめた戦国時代になると16世紀後半頃の中国産磁器（青花）がわずかですが、出土するようになります。

一方、ＪＲ西条駅北側の御建遺跡では、中世の山陽道とみられる道の跡や区画とみられる溝、掘立柱建物跡が見つかりました。戦国時代の遺物も多く見つかっていることから、この時代の「四日市」は、御建遺跡にあった可能性があります。しかし、この遺跡は17世紀中頃になると遺物の量が減ることから、江戸時代前半には生活の中心地が移動したと考えられます。

検出された街並み（地割）：四日市遺跡

出土した陶磁器（江戸時代後半）

入れ替わるように四日市遺跡では17世紀後半から建物跡が確認され、18世紀代に入ると徐々に遺物量が増え、19世紀代（幕末～近代）になると質量ともにピ

ークに達します。この「四日市」の移り変わりは先に述べた『鶴亭日記』の町割りの記述や、広島藩による寛永年間の街道整備の記述と一致しています。

コラム：四日市宿の生活を支えた素焼きの土器、原村焼

原村焼※は、中世の土師質土器にルーツがあるといわれる素焼きの土器です。現在の八本松町原を中心に窯が点在していたとみられ、昭和 40 年代まで生産されていました。

四日市遺跡からも多数の製品が出土していますが、それらは表面の仕上げがやや粗く、色は灰白色から黄褐色または黒色という特徴をもっています。

原村焼の焙烙

『芸藩通志』によれば、江戸時代中期の天明年間（1781～1789）には本格的に操業しており、江戸時代後期の『國郡志御用郡辻書上帖（賀茂郡）』には「ほうろく、土瓶、火鉢、はんどう、七輪、かわらけ…」など多くの製品が記録されています。

この原村焼は、市内の近世遺跡のみならず市外まで流通し、広島藩のご用達を務めていたことや、昭和のはじめころには呉や糸崎まで行商していたことなどが史料（『原村史』原村史刊行会 1967）に記録されています。

発掘調査で出土した遺物では、はんどう甕といった大型品やコンロ、土瓶、七輪、ほうろく鍋など様々な日常雑器が見つかっており、原村焼きは当時の人々の生活にとって欠かせない焼き物であったことがうかがえます。

東広島の近代～現代

検出された釜場遺構

明治に入り、本陣・脇本陣、飛脚、伝馬所が廃止され、宿駅の機能は廃止されました。新時代の幕開けは、四日市にどのような影響を与えたのでしょうか？

宿駅としての機能は廃止されても、西国街道を往来する人々の宿場としての機能は継続し、政治や行政の地域の中心地としての位置づけは変わらなかったため、街並みの急な変化はなかったと考えられます。

しかし、明治 27（1894）年に山陽鉄道が広島駅まで開通すると、東西を繋ぐ陸路であった旧西国街道はその役割を低下させたと考えられます。地域経済圏の結束点であり旅人への旅宿提供をしていた四日市は、少なからず影響を受けたはずです。

近世考古学では、18 世紀後半から幕末にかけて遺物の

出土量が増加する傾向があります。ここ四日市遺跡では、19 世紀以降（特に幕末から明治・大正期にかけて）、爆発的に出土量が増加します。このことは、宿駅機能廃止の影響による処分と考えられる一方で、揃いの洋食器が出土することなどから、明治・大正期になっても食器類の買い替えが行われていたということでもあります。

また、鉄道の開通は、鉄道による酒の大量出荷が可能となったことから、酒の販路の拡大につながり、駅の周辺には新たな酒造施設が続々と作られ、銘醸地として発展しレンガ煙突と白壁の立ち並ぶ現在の景観が形成されていきます。

このように、この地は政治や行政の地域の中心地として、また、産業の中心地としても発展し、現在へと繋がっています。

コラム：西条・四日市の赤瓦（あかがわら）の起源は？

現在、東広島市の景観の代名詞ともなっている赤瓦の街並みですが、発掘調査で出土する江戸時代の屋根瓦は、そのほとんどが黒瓦（くろがわら）となっています。これは茅葺（かやぶき）・板葺（いたぶき）が主流であった建物が、江戸時代中頃以降に母屋（おもや）など主要な建物を中心として黒瓦葺きとなったためと考えられます。

これに対し、赤色の瓦は江戸時代の終わりには在地で焼かれていた※ようですが、黒瓦に比べると出土量が少なく、限られた建物、または限られた部分に葺（ふ）かれたと考えられます。

その後、明治時代に入ってこの地域でも釉薬（ゆうやく）（西条来待（さいじょうきまち））が見つかったことで、本格的に赤瓦が普及し、近代的なレンガ造りの赤瓦窯（かま）が築かれるなど、生産が本格化します。これらによって現在みられるような赤屋根の景観ができあがっていったものと考えられます。

天保６年銘鬼瓦（福成寺）

※江戸時代の赤瓦は、現在の赤屋根にみられる赤瓦ほど鮮やかな色ではなく鈍い赤色をしています。この赤瓦の生産技術は石見（いわみ）（現在の島根県西部）の瓦職人が移住してきて伝わったものです。

天保 15 年銘

赤瓦製祠

西条町下三永では、福成寺所蔵の「天保6（1835）年」銘鬼瓦、市重要文化財「天保１５（1845）年」銘の赤瓦製祠が存在することから、江戸時代の終わり頃にはこの地域で赤瓦が生産されていたことが分かります。

コラム：市史跡　小谷焼窯跡

小谷焼

小谷焼は、砥部焼の系統を引く磁器（高温で焼き上げた吸水性のない硬く白いやきもの）です。

入野村（現在の東広島市河内町入野）の堀内徳三郎らが明治（1868～1912）初期に砥部（愛媛県中部）で窯業技術を学んだ長倉惣十郎を雇い、七間窯と呼ばれる（七つの焼成室を持つ）登窯を築き、窯業を始めたといわれています。

豊田郡（広島県中部）内や砥部から招いた職人など総勢 40～50 人が、窯場や作業場、乾燥場、臼場屋敷などで働き、明治 30（1898）年頃に廃業するまで茶碗、大皿、徳利、鉢、丼などの日常雑器を中心に生産し、一時は海外への輸出も行われていたようです。

陶土は、白市城山の白土を運び、窯場のそばを流れる川を利用した水車で粉砕し、精製したものを使用しました。成型には足蹴轆轤を使用し、乾燥、素焼き、染付、本焼きを行いました。主に型紙染付（型紙摺絵）によって絵付をおこない、素地は白色に少し青みがかり、呉須（藍色の顔料）の鮮やかな発色が特徴の独特の美しさで知られています。

また、色絵（上絵）も試みられたといわれていますが、資料が少ないため詳細は不明です。

東広島の遺産からは、古い時代から海を越えた交流があったことや、水田耕作の発展から豊かな穀倉地帯となり、それを基盤としてこの地域が政治・経済の中心的な拠点として発展してきたことが分かります。

国際学術研究都市として発展を続ける東広島のバックボーンには、このような歴史的な背景があることを知っていただけたら幸いです。

東広島の黎明展　展示解説

発行日　2023（令和5）年3月31日
発　行　東広島市出土文化財管理センター
〒739-2201 東広島市河内町中河内 651 番地 7
TEL:082-420-7890　　FAX:082-437-0320
編　集　東広島市教育委員会生涯学習部文化課
E-Mail　hgh207890@city.higashihiroshima.lg.jp